

釧路市立中央小学校 フィールド学習 1 回目 実施内容

《概要》

[日程] 2022年7月7日(木) 11:10~14:20

[参加者] 6年生児童 17名

[講師] 温根内ビジターセンター 本藤センター長

[案内] 温根内ビジターセンター 藤原指導員

[フィールド学習の目的]

キャリア教育(様々な仕事を知る)

環境教育・ふるさと教育(豊かな動植物に出会い、地域を誇りに思う気持ちを育む)

[実施プログラムの概要]

11:00 温根内ビジターセンター駐車場到着

11:10 本藤センター長からの講話「この仕事を目指した理由、センターのお仕事など」

12:50 オリエンテーション

12:55 木道散策

14:50 トイレ休憩後、温根内ビジターセンター駐車場出発

《実施内容(記録)》

■本藤センター長からの講話(11:10)

○なぜこの仕事を目指したのか

元々は自然関係の勉強をしてきたわけではなく、東京でサラリーマンをしていた。毎朝満員電車で揺られて仕事をしていた。その時は北海道で働きたいとは思っていなかったが、北海道を一人旅した時、衝撃を受けた景色に出会った。摩周岳に登って頂上から見た摩周湖。当時、自分が普段生活している東京はビルが立ち並び空もあまり見えず人も多くいて、とても窮屈な場所だった。この雄大な景色に惹かれ、何とか北海道で働きたいと思うようになった。とはいえ、仕事をすぐに辞めることもできず、自然関係の勉強をしてきたわけではなく、どうしようかと考える日々が続いていた。そんな中、2004年に友人が癌で亡くなりとても悲しく、人生は急に終わってしまうんだと実感した。本当に自分がやりたいことをやりたいと強く思い、辞職して札幌に移住し、一年間自然について勉強した。翌年、弟子屈町に移住してカヌーガイドを行った後、環境省のアクティブレンジャーという仕事に就いた。4年間しかできない仕事だが、野生動物の保護や調査を行った。その後、タンチョウを研究する仕事を一年行った後、温根内ビジターセンターの職員となった。普段出会うことが出来ない野鳥に出会うことができる仕事が多くあり、交通事故にあって死亡したタンチョウを収容し、なぜ事故が起きたのか調査したりという仕事もしていた。

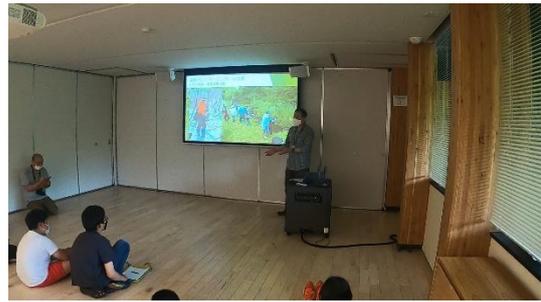
2013年に温根内ビジターセンターの職員となった。ここを管理しているのは日本野鳥保護連盟という財団法人で、自分はその団体の職員。鶴居村に移住をして9年目となり、公私ともども充実した暮らしをしている。



○温根内ビジターセンターの仕事

《自然情報の収集・発信、データの蓄積、情報発信》

木道から見られる植物の開花情報や野鳥、動物などの情報を集めて日々記録している。様々な植物の花が咲く時期を10年、20年と記録しておくことで、花が咲く時期が変わってきているのかということもわかってくる。様々な野鳥の観察情報を記録することで、これまで確認できなかった鳥が見られるようになったといったこともわかる。また、ビジターセンターやSNSでこうした情報を発信するということも行っている。ビジターセンターに来た人が、より釧路湿原を楽しめるように様々なことを行っている。



《木道の巡回、安全管理、維持管理》

風が強い低気圧が去った後には、時々木道に倒木がかかっている時があり、伐採をして取り除き、観光客の人が安全に木道を通ることが出来るようにする。また、遊歩道が傷んで穴が空いている場所などがあれば板で補修する。遊歩道の近くでハチの巣があった場合には観光客の人が刺されないように安全な方法で除去するという事も行う。冬も施設は開館しているので、階段も含めて手作業で除雪を行っている。

《観光案内・ビジターセンター利用者案内》

世界中の多くの方が釧路湿原を楽しもうとビジターセンターに立ち寄る。ここの木道の状況、見られる花の他、周辺の観光地についての問い合わせなどもあり、観光案内的な仕事も行う。電話での問い合わせもあり、国内外問わず対応している。

《環境教育、普及啓発活動》

皆さんと同じように多くの小学生が湿原を学習したいとここを訪れる。いろんなお話をしたり、釧路湿原の素晴らしさを伝える仕事をしている。冬も同様に対応しており、外来生物の駆除をしながら外来生物を学ぶといった環境教育も行っている。

○やりがい、嬉しかったこと、悲しかったこと

東京でサラリーマンをしていて北海道の自然に憧れて来ているので、大自然の中で日々働けるということが、毎日毎日のやりがい。動植物の状況は同じようで日々変わっていく。多くの人が訪れ、北海道のこと、自然のことについてお話できることがとても嬉しいことであり、釧路湿原を世界中の人に伝えることができるということは、大変大きなやりがい。

強いて悲しかったことを挙げると、ごみの投げ捨て。年間約7万人の人がこのセンターを訪れるが、皆自然を楽しみに来ている。多くの人が自然を満喫して帰っていくが、ごみを捨てていく人もいる。木道やビジターセンターの施設内など、とても少ないが、無くならない。

○資格が必要か

ビジターセンターの職員になるために資格は必要ない。自然の事を勉強したことがあるか、同じような仕事をしたことがあるかといった経験があると働ける可能性が高くなる。また、募集があまり出ない、欠員が出ないということもあるので、タイミングということも大切になる。環境省のレンジャーになりたい子がいると聞いたが、レンジャーは国家公務員になるので、しっかり勉強し公務員試験を受けて採用されれば国立公園のレンジャーになることができる。頑張ってもらいたい。

○まとめのお話

季節によって出会える風景、動植物はガラリと変わる。今の時期はホタルも見ることができ、ぜひ、今後も遊びにきてもらいたい。

■オリエンテーション（12:50）

○プログラム、木道での注意点の説明

■温根内木道での活動（12:55）

○ホザキシモツケ

昨年の8月にはまだ咲いていたかもしれない。一塊に見えるが、一つ一つの小さな花が集まって一つの花のように見える。先にほわっとしたものが出ているが、雄しべと雌しべ。これもピンク色をしている。花粉や蜜を集めに蝶も寄ってくる。ちょうど珍しいカラフトカネキマダラセセリがホザキシモツケの花に飛んできている。日本では道内でしか見られない。



○エゾオオヤマハコベ

ハコベの仲間では花びらがいっぱいあるように見えるが、1枚1枚の花びらが裂けて多く見えており、実は花びらは5枚しかない。

○ヨシ

元々はアシと呼んでいた。悪いにつながるので、あまり良くないということでヨシになったという話がある。

○ヤチマナコ

ヤチマナコを漢字で書けるだろうか（一人の児童が渡されたホワイトボードに漢字で書く）谷地とは湿原のことで、昔の人は湿原とは呼ばず、ヤチと呼んでいたという話を昨年したかと思う。マナコは眼と書くが、谷地に目玉のような黒いものが口を開けているということで、この名前が付いている。谷地に落とし穴があるので軽々しく遊びに行くなど大人が子どもに言っていた。この木道も浮いている状態。



絶滅危惧種についての質問が出たと聞いたが、ここに絶滅危惧種がある。棒でつつくと粉が出る。これは花粉で、花粉が出るということは花が咲いているということ。カラフトノダイオウと言う。漢字で書くと、樺太野大黄と書く。漢方薬に大黄というものがあり、そこからきている。どこにでもあるような気がするが、水浸しのところにしか生育しない。湿地が少なくなっている分、数が減ってしまい絶滅危惧種になってしまった。

絶滅危惧種ではないが、ヤチマナコの回りにはいろいろな植物が咲いている。これはドグゼリといい、毒を含んでいるので、食用のセリと間違わないように。この植物も水浸しのところにしか生えていない。

○ヤチボウズ

草が多く生えていてわかりづらいが、今の季節ではこのような状態。正体は、この細長い葉っぱのカブスゲ。成長するにしたがってヤチボウズも成長していく。また、ヤチボウズの上にはいろいろな植物が生えており、他の植物の土台となつてあげるといふ役割もある。

○ウグイスの鳴き声

皆を警戒して来るな来るなど鳴いている。向こうからは見えている。

○ドクゼリ

先ほど見られたドクゼリの花がある。これも小さな花が集まって塊のように咲く。毒があると話したが、シカは人間とは消化器官の構造が違うのか、このドクゼリを食べる。昔の写真を見ると、この場所にはドクゼリが多くあったが、すっかり無くなってしまった。恐らく、エゾジカが食べ過ぎて数を減らしていると思われる。



○ヒメカイウ

毒があるという話を昨年したと思うが、今青い実はこれから熟してきて赤くなっていく。これも毒があるのにシカは食べる。

○チャミダレアミタケ

昨年10月に来た時にキノコの話をしたことを覚えているだろうか。昨年見たものはもっと大きかった。今見えるものは今年生えてきたもの。7月頃から出てくる。昨年、これが生えている木と生えていない木でどういう違いがあるかという話をした。これが生えている木は葉っぱがあまり無く、キノコがない木は葉がある。1回で枯らすのではなく何年もかけて出て来ては枯らすということ。ハンノキは湿原の中で唯一大きく成長できる木ということ、チャミダレアミタケが出てくると弱ってきているということだよという話もした。実際に枯れたハンノキが木道に倒れてくることも多く、見つけた時にはノコギリやチェーンソーで伐って取り除くこともある。



○カレハガの幼虫

終齢幼虫でこれ以上は大きくなりません。タケカレハかヨシカレハのどちらかと思われるが、カレハガの仲間。ヨシを食草としており、この子はもうすぐ蛹となってガとなって出てくる。

○トガリネズミ

午前中に5年生が見つけてくれた。ネズミという名前が付いているが、実はモグラの仲間。ネズミに比べ目がそれほど大きくない。土に潜ったりはしないが、土の中に鼻を突っ込んで土の中の小さな虫を食べる。頻りに食べていないとすぐにエネルギーが尽きてしまう。よく木道の上で死んでいる。あるいは、キツネに襲われる時があるが、噛まれると臭い匂いを出す。その時に、一度捕まえたものをキツネが吐き出す時がある。一度噛まれているので、それで命が尽きてしまうこともある。しばしば木道にトガリネズミの死体を見かける。かわいそうであるが、これも釧路湿原の命のドラマもここで見る事が出来る。

○アメリカミンク

本来ここにはいてはいけない動物。外来種と呼び、ここには結構いる。人間が毛皮を採るために工場があったが、鶴居にも何個かあった。そこから脱走したものが野生化してしまい、木道に出てく

る。木道の上は温かく移動しやすいため、出てくる。ミンクは何でも食べる。先ほどのトガリネズミを食べているかもしれない。

○ヨシ原

今皆が立っているこの場所は1万年前から6千年前くらいまでは海の底だった。海の水が次第に退いていき、今の湿原が次第に出来上がった。温根内ビジターセンターも海が一番深い時には水の底だったかもしれない。ここにキタサンショウウオの絵があるが、サンショウウオはカエルと同じ仲間であらう。産卵する時に他の場所で見ただけではあるが、非常に珍しく、ここでは見たことはない。日本国内では、釧路湿原以外ではほぼ見られない。最近絶滅危惧種に指定された。

8月に去年来た時、ヨシは皆の身長を超えるくらいの高さでもっと大きかった。茶色の茎が見えるが、これは去年のヨシ。これくらいまで成長する。

○カキツバタ

アヤメという植物の仲間、いくつか似たような植物がある。カキツバタの花の特徴として、花びらに白い一本の線が入っている。この白い線の先、奥の方に花の蜜があり、それを寄ってくる昆虫に示すために白い線がある。そこに花粉があり、虫の背中に花粉が付くようになっている。虫に花粉を持って行ってもらうために、この白い線があり、蜜があるということを虫に教えてあげている。花は終わる時期になり、実が付いている。これもエゾジカが好物で、シカに食べられてしまうこともある。この辺りではエゾジカがどんどん増えている。



○ガマ

これからフランクフルトのようなものを出してくる。今ようやく葉を出したところ。

○タヌキモ

これも食虫植物の一種という話を昨年した。黒い粒々があり、中にいっぱいプランクトンが入っている。根はなく、水に落とすとそのまま漂っていく。春先には葉がタヌキの尻尾のように見えるので、タヌキモという名前が付いた。

○エゾアカガエルの死体

これはエゾアカガエルというカエル。先ほど見たアメリカミンクはカエルも好物。カワウソと同じ仲間なので泳ぎが得意で、カエルも良く食べている。なぜここにあるのか不思議ではあるが、もしかすると、ミンクが食べようとして人の気配を察して逃げたのではないだろうか。

○釧路湿原の昆虫

ここに色々な昆虫の写真が載っている。今からトンボが多く飛び始めていく時期で、今日も多く飛んでいた。ヨツボシトンボという種類が一番多い。釧路湿原では1000種類程昆虫が見つかるが、その中で一番多い仲間は何だろうか。(3択でクイズ) 蛾が一番多く800から900種類。トンボや蝶は昆虫の中でほん



の一部で蝶でも 84 種類しかいない。トンボで 46 種類。現在は全体的に見つかっている種数は増えているが、ほとんどが蛾。地味な蛾が実は一番多い。

○カッコウ

カッコウは自分で子育てしない。今日、ノビタキの子どもを見たが、ノビタキの巣が良く狙われ、カッコウが卵を産む。カッコウは 1 年間に 20 個程卵を産むそうで、普通の鳥は 4 個から 5 個程度、タンチョウは 2 個しか産まない。20 個という量は大変な数で、カッコウは自分が子育てしない分のエネルギーを産卵に使っており、卵の数で勝負している。カッコウはずるい鳥のように思えるが、カッコウは自分で子育てせず、他の鳥に任せるといって賭けをしている。カッコウなりに頑張って子孫を残しており、それも戦略の一つ。ずるいというのは人間の思い込みで、そうやって頑張って生きている鳥もいるということ。

○サワシバ

ふさふさしたものは、サワシバの実。中に種が入っている。秋になると茶色になり風に乗って飛んでいく。



○エゾトリカブト

人間が舐めると死んでしまうくらいの猛毒。さすがにこれはシカも食べない。

■トイレ休憩後、温根内ビジターセンター駐車場出発 (14 : 50)